第20回上方の会分科会「地唄と河内音頭」

・ 日時：2020年1月18日午後２時～４時
・ 場所：島之内道仁会館
・ 講師：山下孝夫

略歴　1950年2月大阪市阿倍野区生まれ。京都大学経済学部卒（社会思想史）。
住友精密工業入社。趣味で世界思想･伝統文化･絵画と料理研究。2005年退職。
NPOなにわ創生塾理事、島之内芸能文化協会（西鶴座）主宰。「定期浪曲寄席」
現在は画家･ マンガ家（連載歴）。伝統芸能研究家。料理研究家（毎月教室）。
共著（企画編集）「大阪の神髄」。京都経済短大で経営史を４年間講義。

【講演概要】

大阪の地歌と音頭の歴史と俊徳丸を3分の1ずつで。地歌は「雪」と「ままの川」の聞き所を私が少し演奏しながら解説。三味線といろいろな邦楽の歴史の解説、河内の音頭の歴史と各音頭のさわりの実演。最後は俊徳丸と言うメジャーな演目によって、謡曲・説教・義太夫・音頭の俊徳丸の違いを歴史と実演での紹介があった。ご自身の三味線伴奏やアカペラでの謡曲と講師の博覧強記にあらためて驚きました。

【参考資料から】

＊ 上方歌は、近世邦楽として発達した三味線音楽の一種である。京阪地方を中心に発生し発達したので、江戸の音楽と区別する必要上、土地の唄という意味から「地うた」と呼ばれた。なお「うた」の文字は習慣では江戸では「唄」、上方では「歌」の字が用いられてきた歴史がある。

・ 上方歌は近世邦楽として発達した三味線音楽の一種である。（参考：江戸時代、三

味線は「公家御法度」で禁じられた淫楽だった。「三都の顔見世」古井戸秀夫・東京大学名誉教授・『演劇会。2019.12.』) 京阪地方を中心に発生し発展したので、江戸の音楽と区別する必要上、「土地の唄」という意味から「地うた」と呼ばれた。なお、「うた」の文字は、江戸の習慣では「唄」、上方の習慣では「歌」の地が用いられてきた歴史がある。

・『』二十三「音曲上方唄」には「上方と云ハ他国より京阪を指テ云也。故に京阪ニテハ地唄と云。江戸ナドニテハ上方歌と云也」とある。これに従えば、上方歌はすなわち地歌ということになる。

・ 上方歌には地歌以外の三味線伴奏の歌や、や琵琶伴奏の曲なども含まれる。もともと上方の曲といえば、語り物の「浄瑠璃」と、歌物の「歌」ないし「歌曲」の二種類があった。ところが、三味線を伴奏として劇的に語る「義太夫節」が余りにも人気を博したので、次第に「語り物音楽の浄瑠璃」といえば「義太夫節」のみを示すようになり、それ以外の歌ものを「歌」あるいは「歌曲」というようになった。

・ 「地歌」と呼ばれているジャンルは次のとおりである。長歌、端歌、芝居歌、、、手事物、箏曲、義太夫節、常磐津節、長唄、端唄・うた沢・小唄・俗曲、唄、等であるがポピュラーで上方の香りが濃い義太夫節、常磐津節の解説を引用する。

」、〈義太夫節〉

・ 1600年頃、上方で生まれた操り人形浄瑠璃は、江戸時代の中頃には江戸へも進出し、数十にも及ぶ流派が生まれた。浄瑠璃とは三味線伴奏による語り物音楽の総称で、三味線が渡来する(室町時代に中国の「三絃」が琉球へ渡来し「三線」となり、それを日本の楽器として改良、発展させたものが「三味線」。日本に正式に伝わったのは16世紀ごろと言われている。)以前は、盲目の法師たちが琵琶で語っていた。浄瑠璃の期限は、小野お通(1559～1616)作と伝えられる『浄瑠璃姫十二段草子』であるといわれる。三河国の宿の長者の娘である浄瑠璃姫と義経の悲恋物語であり、当時この曲節が人気を博したので、三味線での語り物といえばｽﾄｰﾘｰが異なっていても浄瑠璃と呼ぶようになった。この浄瑠璃の系列から1684年に竹本義太夫による義太夫節が生まれた。

(常磐津節)

・ 江戸にて豊後節を流行らせた宮古路豊後の高弟、初世文字太夫が扇情第一主義から重厚味を持った舞台音楽への転換を計り関東文字太夫を名乗ったが、「関東」が将軍に対して不敬であると許可されず、1747年になって「常磐津」の姓を許された。常磐津はその後歌舞伎舞踊の新しい活路を見つけ、豊後節の艶っぽい軟派の浄瑠璃から徐々にﾘｽﾞﾐｶﾙで劇的なものへと生まれ変わって硬派の浄瑠璃も語られるようになり、清元節ほどの柔らかさもなく万事中庸を旨としており、舞踊に適したものとなり数々の名曲が誕生した。

(出典:『上方歌歳時記』井澤壽冶著　梅里書房刊)

(河内の音頭)

鉄砲節以後の現代河内音頭が府下を席巻し、他の音頭の貴重さが忘れられ、全国的に重要な地域伝統が文化教養に予算をかけない市町村によって文献保存を見捨てられている。私の知識は専門的探索の結果ではなく、全体のごく一部であるが文献は死蔵されていても図書館もない。市町村による専門家の育成を期待する。なお、実演の箇所は省略したが解説講演には欠かせないと考える。

河内音頭は多くが伝承の世界だが、歌っている地域の範囲が狭く体系的研究としては、全地域を自転車で聞きとって回って関連資料で裏付けされた故村井市郎先生の唯一無二の研究と録音のみで、八尾市の出した河内の音頭今昔以外には放置されている。泉州の音頭では村井先生の友人の民俗学者の乾武俊先生らが編集された公共の調査本がある。私は両先生と何回も面識があり一緒にイベントもしたが先生らの豊富な体験話を聞きに来る人はまれであった。能や歌舞伎や文楽の先行している分野で検討することもできるのでそう言う話も書きだすことにする。

河内の音頭には河内音頭とそれ以外の音頭がある。河内音頭には大別して，交野節(実演)の系統と、各地の個別の節がある。それ以外の音頭には江州音頭とそれ以外の音頭がある。昔の大阪の主な音頭は半九郎節(実演)であったが大阪市内ではもう槇野さんと言う人しかやれまい。伊勢音頭は大阪も含め広く各地で行われているが、

ゆっくりしたリズムなので河内ではラストにやられることが多い。河内音頭の中で非常に古い室町時代に発するともいう八尾常光寺の音頭は正調河内音頭と地元では呼ぶが、八尾の流し（実演）と言う個別の音頭であり、今の河内音頭の元節ではなく木遣り歌の系統と言われ、八尾駅前商店街盆踊りは悪名の朝吉・貞が創立した久乃家出演で久乃家初美は八尾で一番有名なおばさんだった。ほかには、南河内のキリ音頭。恩智なーへーへー。えんや踊り。なんえん。畑音頭、なっこれ。ジャイナ節平音頭。丹北・丹南平音頭。八上切り音頭。念仏音頭。安宿音頭。ヤンレー節。石川の流しなどがある。うちキリ音頭は丹南、錦織、狭山、長野ほかで今もよくやられているかなり技巧的な節である（実演）。
ヤンレー節の名称は、河内のみでなく、全国にある。これは新潟の新保の広大寺くずし・口説がごぜ歌になって江戸に広まりさらに全国化したもので、ヤンレーと言う文句がはいるのであるが、津軽ジョンから他の各地の新音頭のもとになった。八木節にもその影響があり、江州音頭やんれ節もできた。また口説きや流しは例えば鈴木主水など、多くの演目が同じ文句で全国で違う節で歌われてきたが、順次絶滅している。理由は各地が過疎地になっていることが大きい。
　元節の交野節は1879年の資料がある。今では唯一守口の寺方提灯踊りで歌っている。「うちのだーほめがスイカ売りにとやればいよほーホイホイ・（実演）」「真言宗のおじゅっさながあのまおっしゃることにや・・（実演）」などと言う節で、順次繰り返しである。この節をもとに明治初期に今の門真市野口村の中脇久七が、歌亀という音頭取りを名乗って北河内で活躍し、多くの演目を座敷でもやり寄席にも出たが、その特徴は長い物語を自在に詠むことにあった。なお江州音頭や伊勢音頭も明治以後近畿地方で同様に広範に普及した。「東の旅」は今でもほうぼうで聞かれる。伊勢参りの案内になっており、中に貴重な語彙や風物が含まれる（実演）。たとえば、奈良の大旅籠の小刀屋、柿本寺のある人丸村、狂言の三人長者で知られる市守長者、合し塚（箸墓古墳）、元伊勢の発祥地、大津絵節の梅川忠兵衛の三輪の茶屋など、山の辺の道の名所が出てくるが、今では分かる人はごく少ない。
　盆踊りの音頭もその他のさまざまな民衆的伝統芸能も習い事や娯楽として幕末ごろには全国的に波及し改良されていった。おそらく農村歌舞伎の普及や楽器の普及や町の人口増大や移入とも関連があるだろう。特に寄席の発達で芸向上が大きいように思われる。
　大正3年大阪電気軌道（今の近鉄）の生駒トンネルが開通した時、難工事でなくなった何十名もの犠牲者を追悼する盆踊りが、大阪側の日下遊園地で行われ、府下の音頭取りが集結した。この時参加した摂津平野の音頭取り・倉山太三郎（初音家太三郎））は歌亀節にほれ込み、それまでの半九郎節をやめて歌亀節を改良した平野節を創作した。平野節では返し節という次の節を続ける技巧を編み出し、これで江州音頭のレベルに並んで寄席にも進出したのである。後継者の賢次にのち俊徳丸のレコードがある（実演）。太三郎の墓は平野瑞興寺にあり、平野公園の盆踊りは初音家である。ところが、有名な明治26年の河内十人斬りが江州音頭の改良二口節で河内長野の岩井梅吉という富田林警察署長の人力車夫の人が歌われ、道頓堀の中座で新聞（しんもん）詠みとして大ヒットした（実演）。それが河内音頭にもまねされたのである。過去の伝統音楽の権威の人の説で河内音頭は江州音頭から出たと書いた本があるが、それはこの経緯から来る誤りである。
　今の市役所などは十人きりの野蛮な内容を嫌って当8代の岩井梅吉さんは神楽も継承する熱心な伝統芸能家なのにやりづらいらしい。二口節は泉州で梅月、秋月八重丸に継がれる。二口節は河内音頭の枕でも使われカイカイ尽くしやけーけー尽くしなどがある（実演）。
　河内音頭は戦争期に衰退したが、戦後21年、初音家源氏丸（本名田中源太郎）が浪曲の京山幸枝節を取りいれた浪曲音頭を編み出した（実演）。そこへ鉄砲光三郎も習いに来た。鉄砲は関大出で八尾市に勤めていたがプロに転身、妻光子は太鼓で、テイチクレコードで「民謡鉄砲節（実演）」と銘打って100万枚売り上げた。テレビでも毎週放送された。その有名なイントロは浪曲曲師でのち漫才の暁照雄の作曲である。鉄砲はサービス精神豊かな芸人であることないことを話して本当に信じる人が続出しのちの研究で訂正された。また踊りはマメカチなど速い踊りが普及して戦後の音頭に非常にマッチした。なお、河内音頭も含め本来の音頭は民謡ではないが何々音頭と

言う民謡が多いのでまぎらわしい。
　なお、民謡も明治後期以降のもので、それまでは民謡と言う名称もなく、近年では芸者歌手などによってレコード販売や観光目的でメロディー作りが行われ、歌手も民謡業界のプロが中心で、もとの地域の歌は船歌や労働歌や子守歌であったためほとんどすたれた。
　鉄砲節のヒットで先輩の初音家二代目賢次や栄太郎、牛丸、天狗連出身の三音家浅丸たちも登場し、勝新太郎が映画悪名で歌い（初音家指導で鉄砲の太鼓）、さらに京山幸枝若（初代）のレコードは最高の名盤になって今でも節の手本である（実演）。なお幸枝らの浪曲は漫才のロマンショーの太平夢路を経て都はるみの節に影響した。現在音頭取りは群雄割拠して100派1000人と言われるが、河内家菊水丸や天馬鈴若等以外はほとんどアマチュアの季節興行なので、アマチュアしかない登山などのスポーツみたいなものである。八尾駅前に菊水丸の店があって古いコレクションを集めている。
　河内でもう一つメジャーな江州音頭（実演）は、両方やる音頭取りも多く、こちらはもとは八日市祭文音頭と言い、明治期に河内音頭と区別してそういうようになった。発祥は1820年ごろ、武蔵国の（デロレン）貝祭文語り桜川雛山の弟子、八日市の西沢寅吉（歌寅・桜川大龍）が家元で踊れる音頭として始めた。説教・浮かれ節・祭文・あほだら経・チョンガレ・春駒・ほめらなどが類似の芸能である。大鯛の同志に奥村久左衛門（真鍮家好文）がいて、盆踊り（たな音頭）だけでなく座敷音頭まで改良し近江商人も各地で余興で広めたらしい。大阪でも定着したが、八日市の正調の流れは河内を突破することはできず、しがらき節が伊賀・大和・天野山経由で中河内と泉州に伝わり、ほかでは消えて、今の泉州音頭は以前は（本場）江州音頭と言っていた。
漫才創始者の玉子屋円辰や砂川捨丸は江州音頭出身で、またプロの浪曲・万歳・漫才師にもなっていった。祭文はもとは祝詞のようなものであるが、のちに大道芸になり（歌祭文）、チョンガレやあほだら経と並んで浪曲のルーツの一つである。デロレンというのは、口でほら貝を模写してそう言うのであるが、同時に小さい錫杖（金杖）を鳴らす。現桜川雛山は仏事の祭文を伝えるがさびれている。江州音頭の優れた点は浄瑠璃芝居をもとにした本格古典読み物が多いことである。素晴らしい迫力のある世界に通用する節だ。玉子家円辰は1865生まれ、西本為吉・現東大阪市池島村、荒川近く。1905年名古屋漫歳天満天神小屋に出た。弟子に千代鶴。孫弟子に、はんじけんじ・荒川福児笑児。いとこい・博芳坊。人生幸朗・芳蔵。ミスワカナ・河内家小芳。内海好江は荒川小芳の子。
　やんれ節は江州音頭からでき明治後期に全府下で流行した。元祖は千代鶴（実演）。
　泉州の音頭は、今では江州音頭系が圧倒しているが、他に、非常に美しいゆっくりした有名な佐野くどき（実演）は、江戸時代からの佐野の町中だけが大正時代に周辺，京節だった長滝、田尻、日根野，上の郷、新家等に広がる。タオル工場の女工目当てで人が集まったと言われる。もとは泉佐野の日本一の豪商の飯家で行われたというが、戦後周囲に勢力を広め盤石だ。泉州音頭は本場江州音頭、和泉江州音頭、和泉音頭しなど色々あり、横山の花沢会の改良節が古い流れと言う。花沢若丸，白龍玉若、玉秀、宝龍弘若と続く。秀若の和泉くずしはマイナー音頭で北河内の新月節と並ぶ。
ほかの各地僻地の古い貴重な色々な系統の音頭は保存会がたよりである。樫井さんや踊り　下駄　貝塚三夜音頭。土生鼓踊り。樽井、男里、鳴滝のソーレーサー。信達、自然田のさんや。貝掛音頭。西畑、信太山、箱作の音頭。多奈川浄瑠璃くずし。あびこ音頭。横山の雨乞い太鼓踊り。横山くどき。五社踊り。泉州長持歌、などがある。
八木節も江州音頭同様の形で明治の同時期に掘込源太によって大ヒットした音頭で、このような全国の音頭や民謡との関連は深い。

（俊徳丸）
＊「俊徳丸伝説」（高安長者伝説）で語られる伝承上の人物。高安の長者の息子で、継母の呪いによって失明しするが、恋仲の娘・乙姫の助けで四天王寺の観音に祈願することにより病が癒えるという、この題材をもとに、謡曲『弱法師』、説教節『しんとく丸』、人形浄瑠璃や歌舞伎の『攝州合邦辻』が生まれた。近鉄大阪線の「俊徳

道」は四天王寺南門付近から奈良県生駒郡斑鳩町の竜田までを結ぶ俊徳街道で、古くは大阪・玉造と八尾の玉祖神社（高安大明神）を結ぶ未知として「玉祖未知」、明治以降は「十三街道」「俊徳街道」と呼ばれるようになった。

（出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

〈文責：伊藤忠〉